

地域活性化に挑む県・自治体や企業の広報支援

群馬県人会連合会の会報「うぶすな」の取材と編集を基に

Public Relations Support for Local Government, municipalities
and Enterprises in Efforts towards Regional Revitalization

—Based on Interview and Editing of the Booklet “UBUSUNA”—

小 渕 昌 夫

要 旨 :

群馬県出身者やこの県に縁の有る方々が共に集う団体、群馬県人会連合会は、竹内靖博会長の下で、群馬県との交流を深め、県内各地の観光、物産の発展に助力し、群馬から進出している企業の活動を支援している。これらの社会貢献事業の支援のために、県人会では、会報「うぶすな」を発行し、様々な情報を掲載し、会員や関係者に配布している。

この小論で、会の設立から今日までの経緯、特に、過去4年間に掲載された様々な記事の取材や編集に関わる具体的な記事を列記し関係者の活動を支援している。

会報には、山本一太知事の就任から毎年、行政4年間に亘り、新年のご挨拶や年次計画の記事を掲載させて頂いた。更に、群馬県庁広報室で、その年の重点とされる企画を選定し、広報の版下として頂き、合わせて掲載している。

この小論で表現された記述の中で、重要と思われる語彙や表現の理解を深めるために、“キーワード”として記載し、それらを先行研究で学ぶと共に経営実践で得た研究成果に合わせて掲載している。

むすびに、先行研究や経営実践で学び得た成功事例の一端を、地域活性化に挑む中小・ベンチャー企業の経営者に提言致したい。

キーワード：事業構想・ベンチャー企業・DXの推進・危機管理・
災害レジリエンス

1. はじめに

標題の研究に着手する前に、群馬県人会連合会の設立、法人化までの活動と現体制を提示し、社会貢献事業の支援を目指すと共に会報に掲載する取材の骨子を列記する。

次に、新任の山本一太知事の着任の年（2019）から第1期（4年）の終わりまで、毎年行ってきた新年のご挨拶とその年の重点とされる行政計画等を発表された要旨を提示する。

この方針に基づき、県人会連合会は、竹内靖博会長を先頭に、会報編集委員会委員一同共に心を合わせて、所期の目標に向かって取材した資料を編集して、その成果を挙げてきた。

まず、在郷や首都圏で活躍する人達、特に国家や地域を代表する経済界の人達から、知見や今後の展望を拝聴するために、「群馬の人と文化」で紹介された「三山会」を取り挙げた。

この研究の目的は、取材と編集を通して入手した様々な情報を整理し、その研究成果を近隣の自治体や関係企業に伝播して行くことで、県、自治体の行政や企業の経営に参考にしてもらい、少しでも地域活性化に役立つことを願い、広報支援を行ってきた。

この連合会に集う在郷と首都圏在住の人々、そして群馬県に縁の有る方々と共に、皆で、群馬県を愛し、そして懐かしく思いつつ、其々の満足と幸福のために心を合わせたい。

そこで、三山会の会員であった通商産業省の元次官の堤富男さんから、愛郷心の分析と県の魅力に関する所感の一端を拝聴して、研究をはじめて行きたい。

1.1. 群馬県人会連合会の設立¹

平成9年10月26日、東京・市ヶ谷の私学会館アルカディア市ヶ谷にお

いて、150名を超える群馬県出身の同窓会、首都圏各県人会、個人参加、また、伝え聞き、群馬県からも駆けつけた人達で、会場は群馬一色、この会の結成が祝福された。

山崎富治新会長の挨拶や中曽根康弘元総理大臣の祝辞もいかにも群馬県人らしい、やる気を起こさせる元気と気概に溢れたスピーチがなされた。

1.2. 中曽根康弘元総理大臣の設立総会での祝辞（要旨）²

「群馬の風土と県民性は、4Kに要約することができる。

1Kはカミナリ、2Kは空っ風、これらは鋭角的県民性を形成するところとなった。この対極にあるのは、例えば、静岡や広島など温暖で豊かな地帯で、鈍角と言えようか。

そして、3Kにお蚕さん、浅間山大噴火の火山灰で農作物は充分とは言えない。だから、現金収入のために、養蚕にみるように、重い労働に耐えて、上州人は永い間よく働いた。女だからといって、家事だけにかまけているわけにはいかない。

4Kのかかあ天下になったのは、必然的な帰結であった。その様な窮乏に堪え勤勉を貴ぶ気性の本県は、かつて文化、産業、様々な領域で立派な人物を輩出してきた。

県人会連合会という大きな力が結集されたのを契機に、これからは、県知事、県議会人や我々も一緒になって、後世、群馬から有為の人材を掘り起こし育成していく一大プロジェクトを計画的に遂行していくべきです。ノーベル賞級の大学者、3人目・4人目の総理大臣を是非とも実現し、群馬の時代を築いていこう。その意味で、私もこれから群馬県人会連合会の一員として、微力を傾注していく覚悟です。」

1.3. 初代会長山崎富治氏の新年（1998）のご挨拶（要旨）³

心構え：

新年を迎え、会長としての責任を考えるとかなりの重圧感を覚えます。

正直のところ、既に職業別、企業別、学校別、地域別等にそれぞれで大活躍しておられる数多くの県人会を一つに纏めて、連合会として運営し

ていくことは、それこそ大仕事です。役員の皆様、会員お一人おひとりの絶大なご協力を御願い申し上げます。明るく楽しい県人の輪を広げていきたいと思えます。

私の父：

山崎種二は、吉井町出身で、15歳の時に上京し、米屋の小僧として、城山三郎氏の「百選百勝」・小説モデルになるほどの苦労を一身に背負って働き、32歳で独立してからは幅広い活躍をして参りました。しかし、一日として故郷を忘れず、特に、戦後は、毎週土曜日には必ず実家に帰っておりました。公私ともに、上州をこの上なく愛し、第一号の「吉井名誉町民」として色々と町政にも尽くして参りました。さらに、15代続いて上州人の血が流れておりますので、何卒宜しくお願ひします。

1.4. 群馬県知事小寺弘之氏（当時）の祝辞（要旨）⁴

本県は平成5年に人口が2百万人を超え、順調な発展を遂げています。さらに、21世紀に向け、グリーンプランを策定し「元気で温かく住みよい緑の大地」群馬づくりを推進しております。また、来年5月10日には、「聞こえますか森の声」をテーマに、第49回全国植樹祭が、沼田市と川場村を会場に開催されます。この植樹祭を森や水、環境について広く考えていく契機にしていく心算です。会員の皆様のお力添えをお願い致します。

1.5. 群馬県人会連合会の法人化と活動の経歴【一般社団法人：(一社)】⁵

群馬県人会連合会は、平成23年4月6日、全国の県人会に先駆けて社団法人として法人格を取得し、名実共に法的・経済的諸活動の主体として認定されました。

そこで、群馬県の指導を受けながら、有志が各地域、職域、県下の高校の同窓会等を結集し、誰でも気軽に参加できる会の設立準備会を立ち上げました。

平成9年10月26日、群馬県人会連合会創立総会が、私学会館で開催され、その設立が承認されました。初代会長に山崎富治氏（当時山種美術館長、現在名誉館長）が就任致しました。平成17年5月、第9回定時総会で

2代目会長に太田宏氏（当時オータ事務所代表取締役社長）が選任されました。

1.6. 県人会連合会の現体制（特別号）・平成28年（2016）3月⁶

会報編集責任者の交代 副会長・事務局長 古谷 進さん

1.6.1. 組織の会長 竹内靖博氏の就任挨拶（要旨）

かつて行われた全国都道府県人気ランキングでは、わが群馬県は残念ながら下位に甘んじています。都心に近く、自然に恵まれた空気や水も美味しい。比較的災害も少ない所で、生活するには最適な場所であると自負しているのですが、住みたいところ、行ってみたいところとは違うのかもしれない。また群馬県出身で、首都圏で活躍している人は沢山おられます。

この会は、群馬県出身者、また、群馬県に縁のある方であれば、誰でも入会出来る集まりでありまして、群馬の文化、産業、観光等を多くの人達に楽しんで知って頂き群馬を盛り上げ、お互いに会員同士の親睦を図って貰うために出来た団体です。私は、群馬県庁や群馬県企業の皆様と連絡をとりながら、県の振興の為、微力ではありますが、努力致す所存です。

1.6.2. 新しい5つの公益事業（社会貢献事業）

県人会連合会の目指す事業は次の通りです。

- ①観光・物産支援事業
- ②首都圏進出企業支援事業
- ③育英・終活支援事業
- ④芸術・文化支援事業
- ⑤高齢者支援事業

1.7. 会報に掲載の骨子

24号から編集責任者（編集長）⁷ が交代し、新しい思考で一部刷新されて編集が行われた。（担当：副会長・編集長 小渕昌夫）

1.8. 会報の目次

- 1.8.1. 年1回の総会と懇親会の報告
 - 1.8.2. 新年会（新春の集い）
 - 1.8.3. 会長挨拶
 - 1.8.4. 県知事挨拶
 - 1.8.5. 国内外のトピックス
 - 1.8.6. ふる里をめぐるバスツアーの報告
 - 1.8.7. バスツアーの訪問地域の活動報告（自治体・企業等）
 - 1.8.8. ふる里群馬へのエール
 - 1.8.9. 群馬県庁広報室企画案件の掲載
 - 1.8.10. 群馬交響楽団の公演計画の掲載
 - 1.8.11. 関連主要人事の紹介
（会長・県東京事務所長・上毛新聞社東京支社長等）
 - 1.8.12. 群馬の人と文化・（他に、医療、食品、愛郷無限、考古学等）
 - 1.8.13. 首都圏・日本・海外で顕著に活躍する人達
 - 1.8.14. 交流会・趣味の会（ゴルフ・囲碁・カラオケ・お散歩会等）
 - 1.8.15. 俳句・短歌と主幹者の紹介
 - 1.8.16. 新入会員紹介、特に、ベンチャー企業、NPO法人等の紹介
 - 1.8.17. 社会貢献活動の紹介（老人ホーム訪問）
 - 1.8.18. 表紙絵の作家・画家・写真家等の紹介
 - 1.8.19. 同窓会だより
 - 1.8.20. 役員名簿
 - 1.8.21. 編集後記
 - 1.8.22. 広告掲載（ヤマダ電機・上野精養軒・サンヨー食品・ファームドウグループ等）
- （以上の他に、25号～27号で追加した骨子は以下の通り）
- 1.8.23. 25号から特別寄稿（著名人）
 - 1.8.24. 読者の声のページ（26号から）
 - 1.8.25. 群馬県上野村と立命館大学の社会人講座を掲載（特別企画27号から）

2. 研究の背景と県政の推移

2.1. 県政の動向（新任山本一太知事の計画と実施）

2019年、山本一太氏が知事に就任されてから、⁸「全力疾走」で、現場に足を運び、数多くの人達と意見を交わし、あらゆる課題についてスピード感を持って取り組んでこられた。

2020年の新しい年を迎え、常に先頭に立ち、「新・群馬」を創造していく決意を新たにされた。初年は、20年後を見据えた長期のビジョンと今後重点的に取り組む具体的な政策を体系化した基本計画からなる「総合計画」を策定された。

ビジョン実現に向けた3つの要点

（引用：『月刊事業構想』2021年7月号、P-98）

1) ^{かいそ}快疎

新型コロナウイルス感染症の拡大により、開放的で人口が密でない疎である空間「開疎」へ関心が向きます。県ではこの開疎を進化させた、他には無い価値を持ち、精神的に安定した快適な地域である「快疎」を目指します。

2) ^{しどうじん}始動人

変化が激しく、刷新、創造が価値を生む新たな時代に活躍できる人材、即ち、自分の頭で考え、他人が目指さない、領域で動き出し、生き抜く力を持つ人材を育成すことを目指していきます。教育イノベーションプロジェクトを進め、多くの「始動人」を育成していきます。

3) 官民共創コミュニティ

各地で産学官民が多様な分野で連携し、地域の課題を解決する挑戦が進められています。「ビジョン」ではこうした取り組みを「官民共創コミュニティ」という言葉で表現しています。共創の重要性を再認識し、県内各地でこの活動を加速させていきます。

インタビュー：編集部・群馬から世界に発信する「ニューノーマル」

2.1.1. 山本一太知事の新年（2020）のご挨拶（要旨）（会報24号）

- *豊かな観光資源やバランスの良い住環境が整っている。
- *しかしながら、それらの魅力やポテンシャルが正しく評価されていない。
- *これを打破する方策は、発信力の強化が必要であると山本知事は考察された。
- *これらの具体策は、県庁32階の展望ホールに、「動画放送スタジオの開設で、国内外へ発信する」。

2.1.2. 新しいイベントホールの開設と観光キャンペーンの計画

①県立世界遺産センター

『世界を変える生糸（糸の力）研究所』（富岡市・3月）

②群馬コンベンションセンター

「Gメッセ群馬」（高崎駅東口・4月）

③大型観光キャンペーン

「群馬デスティネーションキャンペーン」（4～6月）

2.2. 山本一太知事の新年（2021）のご挨拶（要旨）（会報25号）⁹

- ①コロナ禍において危機管理の徹底のもと、地域経済活動を推進する。
- ②自ら思い描く人生を生き、幸福を実感できる自立分散型の社会を目指す。
- ③地域課題を解決するモデルを創出し、多様な個性を持った人材の育成をする。
- ④優れた農畜産物と全国一の温泉資源を活用した旅行ツアーの魅力を発信する。

会報25号の取材と編集に、新型コロナウイルスが発生し、社会経済活動が様々な形で、萎縮するなどで、不透明な状態が始まった。

2.3. 山本知事の新年（2022）のご挨拶（要旨）（会報26号）¹⁰

- ①コロナ禍の対応で、「愛郷ぐんまプロジェクト」や飲食店等への応援をする。（地域経済の早期回復に向けた対策）
- ②新たな時代を切り開く「始動人」を育成、新しい学びを推進する。

- ③スポーツや文化芸術による地域振興、地域資源を生かした観光、ぐんま暮らしのブランド化、外国籍の県民との共生・共創の課題の解決をする。
会報25号の取材と編集に始まった新型コロナウイルス、更に、変異株（オミクロン株）が発生して、不透明な社会情勢が続きました。

2.4. 山本知事の新年（2023）のご挨拶（要旨）（会報27号）¹¹

- ①日本の温泉文化をユネスコの無形文化遺産登録運動として盛り上げる。
②他県より先駆けて「DXの推進」や「災害レジリエンスの強化」の推進をする。
③「Gメッセ群馬」において、「G7群馬高崎デジタル・技術大臣会合」の開催をする。
（地域課題解決の推進に大きく弾みをつけた）
会報27号の取材と編集に、更なる災いである、インフルエンザ等が波状的に襲来し、社会経済活動が様々な形で委縮するなど、不透明な状態が長続きして参りました。

2.5. 群馬県庁広報室の企画（毎年、4事案）と群馬交響楽団の公演の広報支援

2.5.1. 会報24号¹²

- ①企画部企画課未来創生室・地方創生係 「ぐんまふるさと納税」
②企画部地域政策課過疎・地域企画課 「ぐんま暮らしの魅力発信や相談」
③コンベンション推進課 「Gメッセ群馬誕生」
④ぐんまちゃん家 「1F：アンテナショップ 2F：レストラン」
⑤群馬交響楽団 「75年の響き」

2.5.2. 会報25号¹³

- ①知事戦略部戦略企画課未来創生室 「ふるさと納税」
②地域創生部ぐんま暮らし・外国人活躍推進課 移住促進係 「24号と同」
③ぐんまアグリネット 「TSUIUNOS・県産農畜物の情報」
④ぐんまちゃん家 「1F：アンテナショップ 2F：レストラン」

- ⑤群馬交響楽団 「コロナ禍を超えて」

2.5.3. 会報26号¹⁴

- ①知事戦略部戦略企画課（個人）連携推進係（企業）総合計画室 「ふるさと納税」
②地域創生部ぐんま暮らし・外国人活躍推進課 移住促進係 「24号と同」
③ぐんまブランド推進課 「全国どこからでも群馬産が買える」
④ぐんまちゃん家 「1F：アンテナショップ 2F：レストラン」
⑤群馬交響楽団 「新時代へ向けて、群馬交響楽団のこれから」

2.5.4. 会報27号¹⁵

- ①知事戦略部戦略企画課（総合計画・EBPM推進室） 「ふるさと納税」
②地域創生部ぐんま暮らし・外国人活躍推進課 移住促進係 「24号と同」
③ぐんまブランド推進課 「全国どこからでも群馬産が買える」
④群馬県内唯一の県営スキー場検索 「ほうだいぎ」
⑤群馬交響楽団 「日本一の地方オーケストラを目指して、群響のこれから」

2.6. 群馬の人と文化¹⁶ で紹介された「三山会」

会報24号で、登場した作家でジャーナリストの富澤秀機¹⁷さんに「三山会（さんざんかい）」の創立に関して取材させて頂いた。

この会は、経済人による親睦団体で、発足と運営は富澤さんが行ってきた。わが県出身の経済人や指導的立場の人々は自分たちが生まれ育った土地に強い愛着と愛情を持っている。子供の頃を過ごした故郷、自然、友人達への愛情は深く、その発展を望んでおり、その知恵や情熱を生かさない手はありません。平成7年（1995）末に、電通の会長だった木暮剛平さん、岸暁三菱銀行頭取（共に故人）の賛同を得てこの集まりを立上げ、2017年頃まで10年余で、35回ほど会合を重ねたでしょうか。

話題は日本経済から群馬県の課題までいつも和気あいあい、時には小渕恵三首相、福田康夫官房長官も顔をみせて盛り上がりました。

第14回定例会に小淵首相出席（会員14名が参加。1999年（平成11年）5月12日付上毛新聞・会報に写真掲載）、日本経済の現状など懇談。座長・木暮会長、副座長・岸三菱銀行頭取、石原内閣官房副長官、堤通産省元次官、猪谷AIG会長、田島カナダ大使、新井オリコ会長、秋山住友商會会長、平田協和発酵会長、石原鐘紡会長、富澤日本経済新聞常務、牟田上毛新聞東京支社長、山口第一生命副社長、と筆者（理想科学工業専務）の14名でした。

その後、三村明夫さん（元新日鉄社長、日本商工会議所会頭）も会員として参加された。

会員から、「訪米は大成功だった。日米の同盟は関係を高らかにうたいあげ感銘した」と、堤富男中小企業金融公庫総裁（当時）、「全国銀行協会会長として金融対策で大変お世話になった」と、（岸暁東京三菱銀行頭取）、「（官房副長官として）七代の内閣に仕えたが、日増しに上昇率が上がる例はなかった」と（石原信雄地方自治機構理事長）等の所感が言上された。

筆者は、「産学官でもベンチャービジネスの育成に力を入れてほしい」と具申致しました。

3. 研究の目的とその範囲

会報の取材と編集を通して入手した様々な情報を、県や県下の自治体と企業別に分類し、そこから、重点課題を抽出し、県や県下の自治体には行政の視点で、一方、企業には経営の視点で、その神髄を研究することで少し理解を深めてみた。その研究成果を近隣の市町村や、また、様々な業種の企業に伝播できるように広報資料を整理し広報の支援を行ってきた。

3.1. 上州に対する愛郷心の分析

先ず、上州に対する愛郷心の分析を堤富男さん¹⁸【（一財）機械システム振興協会会長】の特別寄稿（会報25号）の所感を拝見してみることにする。尊敬する梶山清六先生の言葉を借用してと、前置きされてその要旨を次の様に分析しておられた。

第一は、東京から群馬に車で戻る時、高速道路を走っていて、群馬が近づくにつれて、上毛三山が両手を広げて、母の胸に抱かれるように、迎えてくれる時、私は、良い故郷をもって幸せに思う。上毛三山は、其々個性を持っている。見てよしの赤城山、泊ってよしの榛名山、登ってよしの妙義山である。

第二は、この山々を中心に、春夏秋冬の変化と梅、桜、紅葉など装飾が施され、その巡りに多様な温泉が多数湧き出る里がある。この景色に、色を添えるのは何ととっても坂東太郎こと、利根川であろう。

第三は、食べ物の多様性である。米も、麦も取れる二毛作地帯が多く、決して、うどん県No.1でも、そば県No.1でもないが、両方美味しいものがあり、お切込みは、上州人全部でないが、郷土料理として、心にしみる料理である。

第四は、昔の記憶で、群馬の生糸はその名を世界に轟かせた富岡製糸工場が、官営工場として設立され、その製糸技術を日本中に広めた功績は、「世界遺産として」認められている。私は、製糸業という製造業の発展は、実は、戦時の中島工場の飛行機製造と相まって、戦後の群馬の製造業の基となったと考えている。勿論、東京圏と言う消費地を抱えての地の利の良さもあったが、戦後自動車産業、重電機などの重要産業が群馬に立地したのは、歴史の必然と考えている。

第五は、これを支えたのはその交通の要衝であったことによるものである。昔の中山道、上州路が信越本線、上越本線になり、新幹線がいち早く走り、産業、観光の発展の礎となっている。

第六は、上州の人材の豊富さである。総理経験者の4人は勿論のこと、上毛カルタ（上毛かるたは上州人のふるさと）を引くまでもなく、新島襄、内村鑑三、田山花袋など、前述の三山会（富澤秀機さん記事）の石原信雄さん（元内閣官房副長官）、財界では、木暮剛平さん（元電通社長）、岸暁さん（三菱UFJ銀行頭取）、最近では、三村明夫さん（元新日鉄社長、現日本商工会議所会頭）など、話は尽きない。私の同級生だけでも、OECD首脳No.2となった人など枚挙にいとまがない。

第七は、このような人材が豊富なのは、過去の歴史の長さと同程度の気候

風土の厳しさに関係があると思う。子供の頃から遊び場に使っていた二子山古墳であり、その後の戦国時代、江戸時代の長い郷土の歴史がずっしり盛り込まれており、その風土も空っ風や雪を含め適度に厳しく人格形成に大いに役立ってきたと想像する。

3.2. 研究課題と対応（県の行政）

3.2.1. 魅力度ランキングが低いことに対する対応

群馬県は豊かな観光資源やバランスの良い住環境など多くの魅力に溢れているが、その魅力やポテンシャルが評価されていないと山本知事は感じている。

この対応は、有効な発信力の強化が必要で、県庁32階の展望ホールに「動画報道スタジオ」を開設する。様々な工夫を凝らし、国内外に発信する。（会報24号掲載）

観光業界紙等の群馬に対する観光報道（会報25号掲載）では、次の様に報じられていた。第34回につぼんの温泉100選（観光経済新聞社主催・2020年12月）では、全国1位は草津温泉（18年間連続1位）、13位は伊香保温泉、37位、万座温泉。

日本の観光地ランキング20位の温泉（ジパング倶楽部・交通新聞社2020年7月）では全国1位は草津温泉、19位万座温泉、20位伊香保温泉。

旬刊旅行新聞の北関東特集では（2020年10月21日付）魅力満載の群馬を紹介している。

JAFMate（日本自動車連盟・2020年11月1日）、「日本の魅力、再発見」“高原に恋して”で、1位にランクされた草津温泉観光協会によると、「温泉の目的は1つだけとありますが、入浴だけでなく、四季折々の風景の中、温泉情緒を感じながら温泉街周辺の散策やお食事、お買い物等を楽しむことが出来る」ように努めていますとのことでした。

*全国都道府県魅力度ランキングについて、2022年10月では、群馬県は44位にランクされている。（ブランド研究所・ダイヤモンド社）

「愛郷無限」に特別寄稿して下さった堤富男さんの所感（会報25号掲載）によると、「ここまで執筆してきて、（上述：3.1の後）これは愛郷無限どこ

ろか、「愛嬌ボケ」と言われそうな気がし始めたのは、群馬県の魅力度ランキングが日本全国で第40位前後ということを知ったことに関係があるかもしれない。しかし、何と言われようと、私の愛郷心は変わらないし、ランキングは実態を知らない人の印象でしかないと思う。百歩譲って山本知事がおっしゃる通り“魅力度”ランキングではないのではないかと、思う次第である」。更に、第19回総会で、県人会連合会の会長に就任した竹内靖博さんの所感¹⁹によると、「かつて行われた全国都道府県魅力度ランキングでは、我が群馬県は、残念ながら下位に甘んじています。それも最下位に近いところの結果を報道で見た時に大変なショックを受けたものでした。なぜだろう、都心に近く、自然に恵まれた空気や水も美味しい、比較的災害も少ない所で、生活するには最適な場所であると自負しているのですが、住みたい所と面白い所、行ってみたい所とは違うのかも知れません。また、群馬県出身者で、首都圏で活躍している人は沢山いるのです。政界、官界、財界、芸術、芸能等各界で有名な方が多勢いらっしゃいます」。と語っていました。

3.2.2. “Gメッセへの期待²⁰”

県人会連合会理事の田部井正次郎さんの提言は以下の通りです。

「人口が減る中であって、交流人口を増やして経済の活性化と地域振興を図る必要があり、群馬県ではMICEと豊富な観光資源を一体化に取り上げて「ビジター産業」を推進すべきというものであった。その後、北陸新幹線、北関東道の開通などで、広域インフラが大幅に改善された。国では官公庁を設置して施策を展開した結果、国際会議の大幅な増加やインバウンドの、盛況の下、Gメッセが開業するに当たり、一層のビジネス発展を期待して、何点が要望したい。」

第一は、高崎という地の利と優れた施設を活かした戦略的な営業展開、北関東のみならず、首都圏と東北・信越・北陸圏を結ぶ優れた拠点性を最大限に活用したマーケティングと事業展開が強く望まれる。

第二は、既存のMICE誘致に加え、例えば、メッセ私有用地を活用した試乗会を伴う新車発表会など他施設が追従できない企画を売り出す。ま

た、富岡製糸場、古墳、遺跡、温泉等周辺の観光・文化資源を一体的に活用した群馬・高崎ならではの会議・イベントの企画。

第三は、国際会議等を誘致するための長期視野に立った専門職員の育成。多様な MICE を円滑に受け入れるための地域体制の整備。

第四は、宿泊・アクセスの整備、国際 MICE・観光客の受け入れのため、高崎、前橋市内に、国際級のホテルの建設が急務である。また大型イベントを地域全体で、円滑に受け入れるために、伊香保温泉を含めたアクセス体制の整備。

第五は、県内の連携と競争への備え。グリーンドーム前橋を拠点にして前橋 CB が長年築いてきた実績がある。世界に誇る群馬大学重粒子線医学など前橋ならではの国際会議やシンポジウムへの対応は不備であり、前橋市内にも会議施設が必要である。G メッセと役割分担・協調関係を強化して県全体のパイの拡大を図るべきである。一方、22年開業予定の宇都宮コンベンションセンターとの地域間競争も視野に入れた取り組みが求められる。

3.2.3. 人材の育成

地域課題を解決するモデルの創出をしていくためには、多様な個性を持った人材の育成が望まれる。ここで、この教育に参考となる立命館キャンパス主催、ジャパンラーニング株式会社共催の社会人リカレント講座、「企業人から社会人へチェンジメーカー育成プログラム（4期）」を取材。会報27号に掲載。

立命館東京キャンパス 所 長 宮下明大様
ジャパンラーニング（株） 執行役員 中川義之様

取材：編集長 小淵昌夫

チェンジメーカー育成プログラム（4期）：上野村から、日本を変える

主催：立命館東京キャンパス、共催：ジャパンラーニング（株）

開催期間：セッション2022年10月22日～12月22日

チェンジメーカーとは、課題の本質を見極め、試行錯誤を繰り返す

て状況を変化させられる課題解決・変革人材。

今回は、群馬県上野村の協力を得、東京での事前ワークショップと現地のフィールドワークを通して、地域の課題の発見と解決を行いながら、受講生一人ひとりが「チェンジメーカー」になることを目指す実践型の人材育成プログラムである。

参考：第5期講座は、群馬県嬭恋村が予定されている。
(2023年9月24日現在)

県人会連合会として、初めてこの企画の情報を察知したのは、ジャパンラーニング(株)の執行役員中川義之様が、事務局長の古谷副会長にアプローチしてこられたことに始まり、県人会の会員登録を申し出て協力の要請をしてきた。そこで、古谷事務局長から会報編集長の筆者にこの講座の最後の授業をリモートで参加するようにと要望があった。この要望を受けて、立命館大学の宮下明大所長に電話で確認し、リモートで参加した。上野村の課題を考察し、その対応策を提言した。まさに、山本知事が推奨する地域創生の企画に合致する事業として、WEBを検索してみた。この企画は、経済産業省の「未来の教室」の実証事業でもある。最後に、学術の見地から、立命館大学経営学部の斎藤雅通教授の所感や現場を提供し、この講座に協力した上野村の村長の黒沢八郎様からも所感が述べられた。この企画と実施は以下の通り。

「立命館大学の社会人講座」:

群馬県上野村を題材に、社会課題の現場を学び、解決策を提言
「大学の社会人むけリカレント講座」の企画と実施

学校法人立命館東京キャンパス	所 長	宮下明大 様
統括コーディネーター経営学部	特任教授	斎藤雅通先生
上野村コーディネーター(株)上野振興公社	常 務	瀧澤延匡さん ²¹

1. 組織体

主催：立命館東京キャンパス 共催：ジャパンラーニング(株)

協力：群馬県上野村、(株) 阪急交通社

2. 提言の日時と場所

日時：令和4年12月16日（金） 14：00～16：00

場所：道の駅うえの

3. 講座の目標

- 1) 自分を変える、会社を変える、社会を変える
- 2) 新しいリーダーを生み出す社会人PBLと越境体験

4. 講座説明

- 1) この企画は経済産業省「未来の教室」実証事業の後継で、今回で4期目
- 2) 経済産業省では、これからの時代に求められる人材像「課題解決型のチェンジメーカー」を育成する
- 3) 2018年～2019年において、現実の社会課題を題材としたリカレント教育プログラムの開発・実証事業を実施
- 4) 重要な要素は「社会課題の現場」・「摩擦」・「多様なステークホルダー」の3点

5. 今回の目標

今回は、群馬県上野村の協力を得て、東京での事前ワークショップと現地フィールドワークを通して実際の企業や地域の課題を探り、限られた期間の中で合意形成と解決策の提言へと繋げる実践的なPBL（課題解決型学習）を実施する。

6. 今回参加した受講者

IT、コンサルティング、旅行業、メーカーやデザイン等の様々な業界から12人が参加し、3か月かけて上野村を対象地域（フィールド）として実践的な社会課題の解決策を提案した。

7. 上野村の現況

上野村は群馬県の最南端に位置し、1,192名の住民が居られる。関東地方では最も人口が少ない村（島嶼部を除く）だが、その20%がIターン、10%がUターンという全国有数の移住者が多い自治体である。また、自治体と住民との協力によって村独自の循

環型経済をつくり「自然との共生社会」の実現を図っている。

8. プログラムの特徴

- 1) 魅力的なフィールド調査課題（上野村の行政と住民の協力）
- 2) 学びのプロセスをサポート、参加者の成長を促進する仕組みの構築
- 3) コロナ禍で実現したオンライン・ツールの積極的な活用

9. 提言評価委員会

委員：黒澤八郎さん（上野村村長）、瀧上守さん（役場）、内田伸二さん（同）、瀧澤延匡さん（振興公社）、中川善之さん（ジャパンラーニング（株）執行役員）、他5名の計10人

10. 各チームの提案

Aチーム：魅力あふれる村づくり

効果的なSNS戦略と水・森林資源を活用したサウナ施設とアウトドア振興

Bチーム：自立した循環型村づくり

法人向け“実践型脱炭素研修”と“もみの木”を活用したビジネス

Cチーム：住み続けたい村づくり

大人の山村留学―「ヒーリングホリデー/ヒーリングリセット」によるお試し移住

11. 評価委員長の所感：（斎藤雅通教授）

この上野村を対象にしたプログラムの中で、村がどの様に発信して、どの様に発展していくのか、村に観光で来られる方もいれば移住で来られる方もいる。上野村は決して閉じた村ではなくて、色々な人たちが来るオープンな村になっていくことで発展していく。子供たちも含めて上野村が「ふるさと」となって周りに広めていく仕組みづくりによって村も発展するし、他地域も含めて豊かな地域社会をつくっていくことができるのではないか。

12. 上野村村長の所感：（黒澤八郎さん）

いずれの提案も、地域課題をよくつかんで頂いたと思うし、今回

のプログラムへの参加を通じて上野村のことを一緒に考えてくれたことで非常に大きな繋がりができたと思っている。これを機会に、上野村という地域をさらに知り、交流をつなげて行けたらと思う。表面的なことを見ても地域のことは本当の意味ではわからない。今回のプログラムは、上野村はどのような村で何をやろうとするべきなのかを本当によく考えて頂いたと思っている。

3.2.4. 群馬県上野村の行政理念

1. 上野村訪問記²²の要旨

(ジャパンラーニング(株)執行役員 中川義之さん)

上野村は群馬県の最南端に位置し、人口は1,100人で、関東地方では内陸で最も人口の少ない村だが、人口の20%がIターンという全国でも有数の移住者が多い自治体として知られている。村には面積の95%を占める広大な森林が広がり、主な産業は農業と木工業になる。

上野村役場の正面には、村の「中興の祖」ともいえる先々代の村長黒沢丈生さんの銅像が置かれている。この村で生まれた黒澤さんは、海軍兵学校を卒業し、ゼロ戦パイロットとして太平洋戦争を戦い抜き、戦後は、村に戻って1965年(昭和40年)から2005年(平成17年)まで、10期40年村長を務め、現在の村のインフラを整備した。彼が村長に就任した時に掲げた理念は、「栄光ある上野村の建設」

- ①健康水準の高い村 ②道徳水準の高い村 ③知的水準の高い村
④経済的に豊かな村 を、今も受け継いでいる。²³

現村長の黒沢八郎氏は、村役場で前村長の下で長く勤め、その志を受け継ぎながら村長になった。掲げるのは、持続性ある「上野村型循環経済」である。村で出た未利用資源を有効活用することで、環境負荷低減の地域社会を実現する仕組みづくりに取り組んでいる。同時に、主要作物である“キノコ”を大量生産する。「きのこセンター」を設立して、「稼ぐ力の増強」を図っている。自前の資源によって地

産地消で持続性のある社会をつくることを実践している。

上野村は教育にも力を入れている。その代表的な取り組みが「山村留学」。1992年以来、毎年都会から10数人の子供たちを受け入れ、「かじかの里学園」で1年間共同生活してもらうと言うものだ。昨年まで417名が参加した。小・中学生全員が寄宿舎生活を行い、食事の手伝いや洗濯を通じて大変自主性が養われる環境である。

2. 上野村の行政の特徴（ジャパンラーニング社・上野村広報）

- ①「自治体のあり方は、市町村とそこで暮らす住民が決めるものだ」
平成の市町村大合併で、「合併をしない宣言」をし、自立と挑戦の道歩んだ上野村は、今や人口の3割がUターンと言う全国でも有数の移住者が多い村となっている。
- ②村の総面積の95%を占める森林を効果的に活用し、林業の振興、観光業の推進、新エネルギーの活用対策、バイオマス発電、村独自の循環型経済の構築へ、住民が一体となって新しい挑戦を続けている。

3.2.5. スポーツによる地域振興

第一は、東京オリンピック開催に向けて、「オリンピック運動の理念・その発展と現代の課題」に関して、猪谷千春さんが所感を寄せている。²⁴

スポーツは、政治、宗教、人種を始めあらゆる文化の違いを乗り越え、国境を越えて世界の人々を1つに結びつける大きな力を持っている。スポーツを通して世界から集まる人々は、交流を通じて相互の理解を深め友情の輪を広げ、連帯感を広げることによって、より平和で、より住み良い社会づくりに貢献する。

第二は、東京五輪2020の群馬県関係者の栄誉²⁵

- ①ソフトボールの日本チームが決勝で、米国を2-0で撃破し、金メダルに輝いた。

先発投手の上野由岐子選手（ビッグカメラ高崎）が好投、前回実施された2008北京五輪に続く優勝に導いた。（上毛新聞7月28日付）

- ②東京パラリンピック第4日、男子5千メートル（視覚障害T11）で、

県勢の唐沢剣也選手）（県社会福祉事業団）が銀メダルに輝いた。（上毛新聞8月28日）

第三は、社会貢献で郷里のスポーツ振興支援と首都圏の著名人の写真撮影、更に、会報26号と27号の表誌の写真撮影に貢献した、田村明人さん²⁶

第四は、スポーツ振興の功労で旭日双光章受章²⁷の星野博さん

第五は、前橋ふるさと納税大使の高橋光成さん²⁸

第六は、河原湯温泉、あそびの基地：NOAの紹介（会報25号P-15）

2020年8月、ハッ場ダム事業による地域振興施設として「河原湯温泉あそびの基地NOA」として開業。

3.2.6. 文化、芸術、芸能による地域振興

会報24号に掲載された人物とイベントによる交流

①竹内靖博会長が県総合表彰の受賞²⁹

②群馬交響楽団の75年の響き

③神田松鯉（講談師・人間国宝）

④うぶすな短歌会・句会の作品発表と会報表紙の画家・生方純一氏（第91回二科展内閣総理大臣賞）ル・サロン会員。公益社団法人二科会常任理事

第25号に掲載された人物とイベントによる交流

①群馬交響楽団の奮闘

②河原湯温泉・あそびの基地NOAの紹介（ハッ場ダム事業の地域振興）

③“絵画とCGを通して”創造性の研究の高田哲雄さん³⁰

④自費出版大賞の山口隆さん³¹

⑤句“飛天”に収録されている社会性俳句の鑑賞、木暮剛平さん³²

第26号に掲載された人物とイベントによる交流

①特別寄稿、わが考古学人生、設楽博己さん³³

②第12回、町田教室絵画展、高崎カルチャーセンターで、町田譽曾彦さん³⁴

③すばらしき里山、上州甘楽の写真撮影、取り続けて35年、飯野文江さん³⁵

第27号に掲載された人物とイベントによる支援

- ①特別寄稿、富澤大輔さん、小児がんを患ったすべての子どもたちの為に³⁶
- ②国内外で活躍の放送作家、一場麻美さん³⁷
- ③生涯学習、臨書と自由書作品展や書道教室、デジタル墨書創始者、高橋里江さん³⁸
- ④歴史探索：群馬県の能の発祥の地、長昌寺を訪ねる
- ⑤前橋空襲犠牲者追悼法要の営みと戦渦の記録の書評

3.2.7. イベントの立ち上げによる地域振興

その1. キング オブ パスタ

実行委員会 高崎市の活性化に取り組む団体

- 1) 高崎市内のパスタを扱う飲食店が出店し、来場者の投票で優勝者を決める。毎年11月に開催、2019年には県内外から10,500人が参加。
- 2) パスタの由来は、昭和36年に群馬交響楽団を誕生させた地に群馬音楽センターが建てられ、「クラシックを楽しみながらパスタを食べる文化」が広く受け入れられたとする説が有力である。
- 3) 30年以上前、企業経営者がパスタの会を設立し、高崎はパスタの街と提唱した。2009年に、高崎まつりで第1回が開催。第2回は高崎青年会議所。第3回からは、現在の実行委員会が開催している。
- 4) この会の特徴は、地元中小企業の若手経営者と大学生のボランティア組織。
- 5) 新鮮なアイデアと若者らしい行動力に支えられている
- 6) 経営者は営利目的でなく、自ら資金や時間を提供しての地域貢献をしている
- 7) このイベントが1万人を超えて、10年以上の継続しているのは、後援・協賛・協力企業や団体の皆様の協力のおかげである
- 8) このイベントを通じて、地元の魅力を発信して、多くの人を高崎に呼び込んでいる

その2. 群馬の自治体の都内イベント「日本全国物産展」

池袋サンシャインシティで開催

取材：編集長 小渕昌夫

これは全国商工会連合会の主催に群馬から出店

- 1) 2019年11月22日～24日の3日間開催
- 2) 全国47都道府県から、350店舗出店
- 3) 群馬県からはおやつのコナモン、おらが自慢のフードコートのミート工房かわばや浅間高原麦酒等11店が出店。全国から名産、特産品3,000種の出店、集客数は15万人

その3. 2019年群馬の酒フェスタ

東京・有楽町駅前 東京交通会館で開催

取材：編集長 小渕昌夫

- 1) 毎年恒例のフェスタ
主催：群馬県酒造協同組合・群馬県酒造組合 後援：群馬県
- 2) 群馬の蔵元16社：自慢の地酒を試飲していた

3.2.8. 企業変革と新規事業の立ち上げ等による地域振興

その1. 会報24号 マーケティング戦略

イタリア「アルカンターラ社」の成功の秘訣 小林 元さん³⁹

インタビュー：編集長 小渕昌夫、参考文献は注釈に掲載

- 1) イタリア・ミラノ市にアルカンターラ社の設立（合併）
- 2) 東レの開発商品（極細の繊維「マイクロファイバー」）
- 3) 市場調査：開発商品の機能性を評価するのは、ゲルマン系のドイツで調査
- 4) 魅力的特徴：素材が「美しい」
- 5) 優れた特性を持っているので、急がず、特品（汎用品でなく）として大事に育てる

- 6) それには、ブランドを付し知名度の向上に全力を挙げる
- 7) 誰にでも売るのでなく、顧客の階層を「アッパー（上流）とアッパーミドル（中流階層の上）に限定、高い値段で販売すれば、大きな利益が得られる
- 8) この価格を維持するには供給量を需要量よりも少なく抑える（市場を品不足にする）

その2. 会報25号 地産マルシェの営業展開

ファームドゥグループ代表 岩井雅之さん⁴⁰

インタビュー：副会長 編集委員 古谷 進さん

（会報27号 群馬の人と農業支援：農業には夢があり、面白い）

事業の現状と展望

- 1) 東海大学で海洋資源学を学ぶ、卒業後、流通関連企業で学ぶ
- 2) 企業理念：農業、流通
再生エネルギーで地域還流型ビジネスモデルの構築
- 3) 1994年 ファームドゥ株式会社設立
1997年 農地所有適格法人ファームクラブ
2012年 エブリデイファーム設立
2013年 ファームランド設立
2019年6月 東京本部設立
- 4) 設備：ソーラーファームハウス
働く環境が良く、野菜もすくすく育つ
- 5) 電気と野菜を同時栽培するソーラーファームのノウハウは、実績で日本一
- 6) 日本にある農地と自然を最大活用し、利益を生み続け50年先の未来社会を創る夢

その3. 会報25号 P-14 ぐんまの企業の国際戦略の試み

永井酒造（株）社長 永井則吉さん⁴¹

経営支援とインタビュー：副会長 田中庸三さん

- 1) 世界のアルコール飲料は、醸造学的に、醸造酒、蒸留酒、リキュールの3分類
- 2) 一般的に、食中酒で嗜む醸造酒は（民族酒は除く）ビール、ワイン、日本酒、紹興酒
- 3) 日本酒は2000年の歴史（米文化と気候風土に関係）、1973年から減少続く
- 4) 当社は25年前から、ブランドは水芭蕉で、米・香港・カナダへの輸出開始
- 5) 2003年から本格的スパークリング日本酒開発をスタート
- 6) 2008年「MIZUBASHO PURE」を完成
- 7) 2013年にヴィンテージ酒、デザート酒の販売開始
2014年にナガイスタイルを発表し、水芭蕉のブランディングを軸に世界のワイン市場に再スタート
- 8) 現在は40ヶ国へ輸出。2020年 Kura Master 部門最高賞受賞

その4. 会報25号 P-28 群馬のベンチャー企業

オーツェイド（株） 渡部嘉之さん

取材：編集長 小淵昌夫

- 音楽市場：イヤホン市場はソニーやパナソニック等の大手家電メーカーや中国の振興メーカーも果敢に進出するレッドオーシャンの市場。（イヤホンで音感を楽しむ）
- 1) 「良い音を日常に」のコンセプトで、2019年販売台数ランキング1位
 - 2) 事業の内容：圧電セラミックの技術コンサルタント
 - 3) 各社の技術サポートや自社製品の開発を行っているが、自社で特許取得したハイレゾ音源用セラミックツイーターデバイスにしたイヤホンは優れた解像度と卓越した臨場感が得られる

その5. 会報26号 P-14～15 群馬の人と食品

ヒット食品開発の秘訣は“良い味の創造”

サンヨー食品（株）社長 井田純一郎さん⁴²

インタビュー：副会長 古谷 進さん

- 1) 大学では社会学部で、経営学やマーケティングを学ぶ
- 2) 卒業後、銀行に勤務し、平成4年サンヨー食品入社、36歳で社長に就任
- 3) 会社の経営理念は創業から「良い味の創造」です。これは美味しく安全・安心な食品を造り、お客様の健康と成長に寄与して、社会に貢献していこうということです
- 4) 創業時、開発担当の父が、全国行脚で食べた札幌でのラーメンの味に感激、「サッポロ一番」のブランドにした
- 5) 生産・販売の経営戦略は、大阪のエースコックと九州のマルタイと資本・業務提携
- 6) サンヨーは、太平洋・大西洋・インド洋を股にかけて展開を目指すこと
- 7) 海外展開は米国に子会社、中国は康師傅と資本・業務提携。ベトナムでは、エースコックベトナムで創業。近年はアフリカ市場の開拓に力を注いでいる
- 8) 即席麺の長所は、①美味しい、②栄養価が高い、③保存性がある、④価格が手ごろ、⑤製造工程が簡単
- 9) 財団を通して、就学補助、文化・スポーツの各分野に助成金の支給を行っている

その6. 会報26号 P-19 醤油を使い分けると、食はもっと楽になる

(株) 伝統デザイン工房 代表取締役 高橋万太郎さん

取材：常任理事 編集委員 阿久澤克之さん

- 1) この会社は醤油の専門店です。全国100種類以上の醤油を100mlの

小さなサイズの瓶で統一してラインアップしている。前橋に本店、東京のデパート・松屋に直営店、それに、WEBサイトの販売で展開している

- 2) 直売のお客さんの質問は、「この中でお刺身にあう醤油はどれかしら？」
- 3) 一言に、刺身と言っても赤身の魚と白身の魚とでは相性の良い醤油は違うと思いませんか？ すると、そう言われれば…という表情になり、続けて、「例えば、白ワインと赤ワインで、食べ合わせて美味しい素材ってありますよね！」と伝えると、「確かに、白ワインだったら白身のお魚ですよね！」と納得の表情となる
- 4) 醤油は5種類に分類することが出来る
万能タイプの濃口醤油を中心に、色が淡くて塩味の強い白醤油や淡口醤油は白ワイン系、熟成期間が長くてうま味に溢れる再仕込み醤油や赤ワイン系をイメージして戴くと分かる
答：少し塩味が強調された白ワイン系の淡口醤油がお勧めである
- 5) 醤油の多様性をさらに広げていくべく努めていく

3.2.9. 国際交流による地域振興

その1. 会報25号 P-22 海外で活躍する人

外交官の体験と回想、田島高志さん 取材：編集長 小淵昌夫

田島高志さん：1935年生まれ、高崎高、東大卒、豪州大使館公使、カナダ大使、アジア生産性機構事務総長、国際教養大学客員教授、(一財)放送番組国際交流センター理事長、『日中平和友好条約交渉と鄧小平来日』岩波書店等、外交官退任後大学での講義

その2. 県人会連合会会長の竹内靖博さん レト王国の名誉理事に

- 1) 令和3年3月3日、書店経営のシロキヤ書店（桐生市）にパレサ・モセツエ駐日大使が訪問し、大使から名誉理事に直接任命され、社長室に看板を掲げられた
- 2) 大使は、「日本にレト王国を知ってもらい、通商や観光で交流が深められるように助力してほしい」と要望された
- 3) 竹内会長は「国際貢献に努めたい、コロナが終息したら国王にもお逢いしてみたい」
- 4) 令和4年10月11日、レト王国パレサ・モセツエ駐日大使が、桐生市役所で荒木恵司市長と意見交換をした（注30に同じ）

その3. サンヨー食品（株）代表取締役社長 井田純一郎さん 在群馬モロッコ王国名誉領事に任命されている（注42に同じ）

3.2.10. 社会貢献

その1. 2020年ぐんま地域づくり AWARD大賞

ソーシャルベンチャー NPO法人ソソリッサ代表理事 萩原共平
さん⁴³ 取材：事務局長 古谷 進さん

- 1) 高齢者の社会的孤立や孤独を笑顔に変える事業を創業
 - ①独居高齢者見守りサービス
 - ②地域健康サロン
 - ③居場所・相談事業
 - ④企業向研修・協働事業等
- 2) 創業は、高校生の頃、祖母が一人暮らしになり、寂しそうにしていたことが実体験で、22歳の時。

その2. 前橋市の観光PR特使 常任理事の阿久沢克之さん⁴⁴

4. 先行研究と経営実践に学ぶ事例研究

4.1. 地方創生と地域創生の相違についての探索

標題を「地域活性化に挑む県、自治体や企業の広報支援」と命名したのは、以下の様な研究成果により「地域活性化」によるものとした。

一般的に語彙の学びで、広辞苑第3版に求めてみると、

地方は、①国内の一部分の土地、②首府以外の土地。例えば、地方行政は、行政区画上の各地方、都道府県、市町村では、両方が含まれる。

地域は、①土地の区域、区画された土地。例えば、②地域社会は、一定の社会的な特徴を持った地域的な範囲の上に成立している生活協同体等が記載されている。

清成忠男（2020）^[1] は、『地域創生への挑戦』（Challenges of Creating New Communities）で、（序章P-1）地域創生の提唱として、2008年のリーマンショック後は、全国的に景気が冷え込んでいると各都道府県別に提示している。また、地域創生は、（P-247・上から10行目）基本的には、地域の内発的発展に依存すると主張し、更に地域振興はソフトな時代を迎えている。（P-252・下から5行目）地域創生は創造的活動を伴うから、その正否はまさに人材に依存していると提唱している。

4.2. 事業構想

地域を活性化する方策には、様々な研究や経営実践があるが、県人会連合会の会報に記事として記載された事業や考え方の中からその骨子を分類すると次の様に提示できる。

先ず、第一は、絵画とCGを通した“創造性”の研究成果。（特に、事例なし）

第二は、創造の中から、新規に商品化する“新製品開発事業”（サンヨー食品）

第三は、社会の変化や使い方から改良された“改良商品販売事業”（永井酒造）

第四は、新製品や改良商品の製造技術（ファームドゥグループ）

第五は、出来た製品の販売方法や代金回収法（地産マルシェ）：販売ルート
の短縮

第六は、技術と商品・製品の連携（ファームドゥグループ）

第七は、新しいサービス（AI）：（スマホ決済）

第八は、高齢者向サービス（ソシリッサNPO）

第九は、ベンチャー企業（オーツエイド社）

第十は、独創的なマーケティング（アルカンターラ社）

事業構想についての先行研究で、清成忠男（2013）^[2] は次のような研究成果を発表している。

事業構想の根幹部分の一つは事業モデルである。事業モデルについては、アカデミックにも、経営実務的にも、確定的な定義があるわけではない。ここでは、事業モデルについて、次のように定義している。

「経済的価値を創造するための事業の仕組みづくり」である。また、関連して、H.チェスブロウは、「事業モデルとはアイデアやテクノロジーを経済的な結果に結びつけるための仕組みである」と定義し、事業モデルは「二つの重要な機能を実現する」と指摘している。すなわち、「価値を創出すること。そして、創出された価値の一部を収穫することである。ビジネスモデルは新製品や新サービスを生み出すための原料から最終消費者に至る一連の活動で価値を創出する。これらの活動を通じて付加価値が生まれる。そして、これらの一連の活動の中で独自の資源・資産・地位を獲得することで、ビジネスモデルは企業が競争優位を有する領域において価値を収穫させてくれる」という。

具体的には、次の6つの機能を提供するとチェスブロウは指摘している。

①価値提案を明確にする。②市場セグメントを識別する。③バリューチェーンの構造を定義し、企業のポジションを補完する資産を決定する。④企業の収益獲得の方式と製品製造のためのコスト構造と潜在的利益を評価する。⑤サプライヤーと顧客を連携するバリュー・ネットワーク内での企業のポジションを記述する。⑥競争他社に対する優位性を維持するための競争戦略を明確化する。

東出浩教（2018）^[10] は、著書の『LOVE=BASED COMPANY・ガゼル

企業成長の法則』で、「社員が幸せや愛を感じられる企業」を目指す組織を構築するには、次のような配慮が要ると提言している。

①「ビジョンへの共感をベースに会社を創業する。②官僚的な組織は避ける。③ベンチャー精神が旺盛な組織をつくる。④筋の良い仕事で幸せを紡ぐ企業を目指す。⑤成長ベンチャー企業はまず理念を作る。

4.3. ベンチャー企業

ベンチャー企業に関する先行研究は、松田修一(2005)^[3]と柳孝一(2004)^[4]の研究成果を引用し、其々の定義を説明したい。

4.3.1. 定義

松田修一の定義：

「成長意欲の強い起業家に率いられたりリスクを恐れない若い企業で製品や商品の独創性、事業の独立性、社会性、さらには国際性を持ったなんらかの企業」

柳孝一の定義：

「高い志と成功意欲の強いアントレプレナー（起業家）を中心とした新規事業への挑戦を行う中小企業で、商品、サービス、あるいは経営システムにイノベーションに基づく新規性があり、更に、社会性があり、独立性、普遍性を持ち、矛盾のエネルギーにより常に進化し続ける企業」

上に合わせて主な2説がある。

4.3.2. ベンチャー組織体系^[5]と分類（柳孝一）

①大分類は、営利型ベンチャー（企業▶組織）と非営利型ベンチャーにわけける

②営利ベンチャーは、独立型ベンチャー、個人形態、企業革新型の3分類

③非営利ベンチャーは、法人形態と個人形態

④非営利ベンチャーの法人形態は、公共型、NPO、各種団体の3分類

⑤非営利ベンチャーの個人形態は、個人、ボランティア型、SOHOの3分類

4.4. 危機管理

山本知事は、就任二年目の新年のご挨拶で、コロナ禍において危機管理の徹底の下、地域経済活動を推進すると明言された。この危機管理について先行研究を学んでみると、次の様な研究成果がある。

先行研究で、太陽ASG監査法人^[6]が、端的に、リスク（危険）とクライシス（危機）を提示している。

第一、リスク（危険）とは、企業（官）“価値”を損なう可能性を持つ事象のことで、現実のダメージとして発生していない状態にあるもの。（ダメージ未発生状態）

第二、クライシス（危機）とは、現実のダメージとして、実際に企業（官）資産（価値）を減少させている事象。（ダメージ発生状態）

経営実践に学ぶ筆者の定義：ここで、太陽ASG監査法人の定義を参考にして、以下の様に提唱したい。企業の存続ができなくなる外部環境変化、①自然環境の変化、②政治経済の変動や変化、③人為的意図による圧力、④原子力利用上の事故、⑤業界の動向、⑥技術の進歩、⑦競争業者の動向、⑧顧客の動向。^[7]

次に、企業の存続が出来なくなる内部環境変化は、①経営者が経営能力を失う、②組織の人材維持が困難となる、③資産価値を失う、④資金調達が進まない、⑤ITシステムが不具合になる、⑥情報収集と管理能力が低下する。^[7]

更に、筆者は、危機対応と危機を克服すること、即ち、「危機突破力」は、経験と実体験に基づく瞬時の決断と実行、そして時間との対決であると体現している。^[い]

4.5. 災害レジリエンス

レジリエンスに関する研究^[7]は、既に、国際経営フォーラム32号に掲載したので、レジリエンスの定義と最近の研究成果を提示して、災害レジリエンスの解説としたい。

ダイアン・L・クーツ（2002）は、「レジリエンス（再起力）とは何か」と題した論文をHBR『Harvard Business Review』の2002年5月号に寄稿

している。クーツ（2002）は、2001年9月11日の爆破テロ事件、それに続く戦争、リセッション等によってこの“レジリエンス”を理解することがかつてないほど重要に思えてきたと回顧している。

クーツの提唱する主張は、「レジリエンス、即ち“再起力”とは、人々の精神と魂に深く刻まれた反射能力であり、世界と向き合い、理解する能力である。レジリエンスの高い人や企業は、現実毅然と目を向け、困難な状態を悲観することなく、前向きな意味を見出し、啓示（神が人の心を啓いて、真理を教え示すこと）を得たかのように解決策を生みだしていく」である。

筆者のものづくり企業のレジリエンスの定義の仮説は、「想定や想定外の事態（危機. crisis. クライシス）が発生した時、直ちにその危機に立ち向かい、その危機を乗り越えて、その危機の発生時点以前の経営状態を確保すると共に、更なる発展を目指す行為である。」

次に、キーワードの「災害レジリエンス」に対する定義の仮説を示すと次のようになる。災害レジリエンスとは「想定や想定外の事態（危機. crisis. クライシス）が発生した時、直ちにその危機に立ち向かい、その危機を乗り越えて、その危機の発生時点以前の通常生活や通常勤務状態を確保すると共に、更なる発展を目指す行為である」。

しかし、『レジリエンスの時代』^[8]の訳者の柴田浩之は、著書を翻訳した“訳者あとがき”で、レジリエンスとは、「何か問題が生じた時に、元の状態に素早く戻る能力ではなく、あらゆるものの関係は動的であり、時間の経過と様々な出来事の発生によって、状況は刻々と変わっているからだ。それ故、ただ主導権を取り戻すだけでなく、以前と異なる新しい水準で適応し、自分の居場所を確立する能力を意味する。そうして、地球温暖化が進んで自然災害が前代未聞の頻度と規模が発生し、あらたな感染症も繰り返し流行する昨今、自然界の未来の予測が難しくなるなかでは、適応力の重要性が嫌でも増してくる。」と指摘している。

4.6. DXの推進^[9]

山本一太知事が2021年に月刊事業構想の編集者(記者)とのインタビュー

で、群馬県のデジタル化の現状と今後の計画について次の様に述べている。

群馬県はデジタル化が非常に遅れているので、この3月に「群馬県庁DXアクションプランー日本最先端デジタル県へー」を策定した。県庁ではようやく押印不要率や電子決済率が9割を超えたが、これを10割に目指します。教育面では、県内35市町村と連携して、群馬県内小中高で一人1台のパソコン無料貸与を今年度中に実現します。このようなデジタル化を今後3年間で確りと進めて、全国自治体のデジタル化ランキングでトップ5に入ることを目指します。また、産業政策では、スタートアップ企業やベンチャー企業が生まれる環境整備や、其々の企業がイノベーションを起こせるような体制を整え、始動人育成のための教育イノベーションにも注力します。また群馬県には外国籍の方もいらっしゃるので、この4月に、「多文化共生・共創推進条例」をつくりました。こうしたことを複合的に進めながら「NETSUGEN」を中心に、地域課題を解決する新しい知恵がどんどん生まれる流れを作り、20年後には自立分散型社会を実現したいと思っている。

5. 取材と編集を顧みて（感謝）

会報25号の取材と編集の最中に新型コロナウイルスが発生し、更に、その翌年の会報26号の取材中に変異株（オミクロン株）が発生、昨年からの会報27号の取材中には、更にインフルエンザ等が波状的に襲来し、社会経済活動が様々な形で委縮するなど、不透明な状態が長続きして参りました。斯様な状況から、取材先や我々編集委員の双方にとっても行動が制限され、取材活動が思うよういかない場合がありました。

このような環境のなかで、公私ご多用にも拘らず、会報への寄稿やインタビューをご快諾頂きご高説、研究成果、更に、執行された成果や業績などを執筆や口頭でのご披露を賜わり、その年度の会報に掲載し関係者に紹介することが出来ましたことに対し心から感謝申し上げます。また、県人会連合会の事務局あてに直接お寄せ頂きました情報や各種資料、更に、会報のご高覧を賜わり、読者の声として貴重なご意見をお寄せ頂きました方々

にも感謝申し上げます。

6. 考察

取材した様々な記事の中で、地域活性化に寄与している自治体や企業のポイントを挙げてみると次の通りである。

6.1. 自治体

- ①上野村：人材育成で立命館大学との連携企画と実施
- ②キング・オブ・パスタ実行委員会（高崎市）と群響の連携企画と実施
- ③Gメッセ（群馬県・高崎市）を活用した各種イベントの企画と実施

6.2. 企業

- ①ファームドゥグループの電気と野菜を同時につくるソーラーファーム
- ②同上、採れたての野菜を首都圏へ直送するシステム（新鮮搬送）
- ③アルカンターラ社の大量販売しないマーケティング戦略
- ④サンヨー食品の良い味の創造、ブランド戦略や他社との連携販売

6.3. 社会貢献のNPO

NPO法人ソシリッサの高齢者支援事業：ビジネスモデルの企画と運営

7. 今後の課題

前述の「取材と編集を顧みて」で記載の通り、コロナ禍等の影響で取材や編集活動が思うようにいかず、県や自治体支援、更に企業経営に有効な資料を十分に収集することが出来なかった。特に、山本一太知事の行政方針や思いを十分助力することが出来なかった。また、編集長の担当は、1期3年ぐらいで交代すると、編集に偏らない記事が提供できるのではないかと反省する。

8. むすびに、経営実践で学んだ成功事例を基にして、 中小・ベンチャー企業の経営者への提言

8.1. 成功事例

「代金回収は自動振り替えで、銀行と組み新流通方式、配送も倉庫会社に委託」

理想科学工業（筆者：新規事業部長（後に専務取締役）として執行、日本経済新聞1977年11月10日掲載）、（商品取引の決済手段として本格的に使われるのは日本で初めてである。）

8.2. 提言

- ①崇高な経営理念のもと、創造的経営力を発揮して、社内外の人材を活用する。^[あ]
- ②取り扱う商品やサービスに関し、独創的な開発、マーケティング、ロジスティックス、海外開拓の諸戦略を時間差の連鎖で組み上げ、ITで統合し、運転資金に余裕の持てる経営の仕組みを作りあげる。

この戦略が成功するためには組織の目標を明確にし、創造的経営を目指すと共に、他社ブランド（OEM）でなく、自社ブランドで、販路は出来るだけ顧客に近づけて企業を成長させることが求められる。^[あ]

脚注

- 注 1 群馬県人会連合会会報「うぶすな」（創刊号）平成10年【1998】3月発刊P-2。（創刊号の会報編集責任者・事務局長・常任理事 大木紀元さん）。
- 注 2 同上、中曽根康弘元総理大臣の設立総会における祝辞（要旨）P-3。
- 注 3 同上、初代会長 山崎富治さんの新年ご挨拶P-4。
- 注 4 同上、群馬県知事 小寺弘之さんの祝辞P-4。
- 注 5 会報18号 県人会連合会の一般社団法人化P-5。
- 注 6 会報特別号 県人会連合会の現体制 会長 竹内靖博さん、事務局長・編集長 古谷進さん。

- 注7 会報24号から27号迄 編集責任者(編集長)が交代、副会長 小渕昌夫、プロフィール:前商、神奈川大学卒、早稲田大大学院修了、大手電機メーカー、理想科学工業(専務取締役)、退任後エイピーベッカー社長(85歳で精算)、日本危機管理学会常任理事、現在・社会福祉法人前橋至道会理事。
- 注8 会報24号P-5(群馬県知事・新年(2020年)のご挨拶)を引用
- 注9 会報25号P-4(群馬県知事・新年(2021年)のご挨拶)を引用
- 注10 会報26号P-4(群馬県知事・新年(2022年)のご挨拶)を引用
- 注11 会報27号P-4(群馬県知事・新年(2023年)のご挨拶)を引用
- 注12 会報24号P-11~15
- 注13 会報25号P-6~10
- 注14 会報26号P-8~12
- 注15 会報27号P-8~12
- 注16 会報24号P-18~19 三山会
- 注17 会報24号P-18~19 経歴:1942年前橋生まれ、早稲田大卒、日本経済新聞社入社、ワシントン特派委員、政治部長、編集局長、常務、大阪本社代表、テレビ大阪社長、会長、現在前橋を拠点に執筆活動中、文化庁文化審議会委員、首相官邸観光立国推進連絡会議委員、国土交通省交通審議会委員、ぐんま観光大使等。
- 注18 会報25号P-5 堤富男さんのプロフィール:東大法1962年卒、通商産業省入省、94年事務次官就任、退任後、中小企業金融公庫総裁、三菱商事(株)取締役等歴任、三山会のメンバーで会報24号p-18~19。
- 注19 会報特別号P-3 竹内靖博さんの会長就任挨拶。
- 注20 会報会報24号P-10 田部井正次郎さん「ふる里群馬へのエール」プロフィール:前橋商業高、早稲田大商学部卒、JTB入社、ホノルル支店等勤務後、(株)国際会議事務局代表取締役、(財)千葉コンベンションビューロー専務理事「15年勤務」、城西国際大学非常勤講師、国際会議協会日本委員長他。
- 注21 瀧澤延匡さんの経歴:1980年生まれ、神奈川大学卒業後、出版社勤務、2006年上野振興公社入社し企画・営業に従事、教育旅行の誘致、上野村婚事業、対外とのネットワーク構築に従事。
- 注22 会報27号P-23 上野村訪問記、ジャパンラーニング(株)執行役員 中川義之さん。
- 注23 黒沢文生さん:上野村長、前全国町村会長、大正2年生まれ、旧制富岡中学卒、海軍兵学校卒、海軍少佐、連続10期の村長、地元森林組合・農協組合長、国土審議会特別委員、農政審議会委員等、『技に夢を乗せて、ものづくりエッセイ集』(平成12年)編集:群馬県商工労働部職業能力開発課、P-44~45。
- 注24 会報24号P-6 猪谷千春さん:1931年生まれ、北海道出身、1936年父の故郷である群馬県富士見村の小学校入学、1956年オリンピック(イタリア)で、スキー男子回転競技で銀メダル獲得。1982年、国際オリンピック委員に就任。1987年理事、2005年国際オリンピック委員会副会長、2015年前橋市名誉顧問、現在、国際オリ

ンピック委員会名誉委員。

- 注25 会報26号P-22 東京五輪2020・群馬県関係者のエール。
- 注26 会報25号P-26 郷里のスポーツ振興支援の田村明人さん：1941年生まれ、群大卒、卓球指導、県中体連卓球部委員長、赤城国体卓球強化選任コーチ、県内中学校へ卓球指導、スポーツ振興功労賞、美術教育では全国教育美術展中央学校賞（NHK会長賞）等。
- 注27 会報26号P-26 星野博さん：昭和41年前商、日体大卒、スポーツ振興功労賞日本ソフトテニス連盟では、様々な企画や運営に協力したが、特に、「トーナメント作成ファイル」は、役員、補助員の大幅削減や業務の簡素化に役立った。
- 注28 会報26号P-28 高橋光成さん：前橋育英高校卒、第95回全国高校野球選手権大会で優勝の投手、毎年、渋川市の「子持山学園」を慰問。
- 注29 会報24号P-17 2019年、群馬会館で、群馬県総合表彰が行われ「当連合会が長年にわたり群馬の観光、物産等への支援に貢献」したことで評価され、竹内靖博会長が、大澤正明知事から県総合表彰を受賞した。竹内靖博会長の経歴：株式会社シロキヤ代表取締役、(桐生市)、(株)グランリーブル代表取締役（東京・目黒区）、(公社)目黒法人会会長、群馬県書店商業組合理事長、桐生商工会議所常議員、東京商工会議所、目黒支部、情報卸分科会長、群馬県青少年健全育成審議会委員、レソト王国の名誉理事。
- 注30 会報25号P-20 高田哲雄さんのプロフィール：1949年前橋生まれ、群大卒、東京芸大大学院修了、文教大学教授、(一社)亜細亜美術協会理事長、3Dディスプレイを活用したコンテンツを研究し、開発中の「立体絵画」としての新しい領域の提案をしている。
- 注31 会報25号P-21 全国新聞社出版協議会主催の第6回ふるさと自費出版大賞山口隆さんは、前述の「三山会」のメンバーでもある。渋川高、東大卒、第一生命保険副社長、第一ビルディング社長、著書は「赤城山残照」。
- 注32 会報25号P-25 句集著者、元電通会長、三山会座長の木暮剛平さん：1920年生まれ、渋川中学（現渋川高）卒、1948年東京大学卒 1993年会長、日本広告業界会長、経済同友会副会長、1977年「風」入会、沢木欣一先生に師事する。
- 注33 会報26号P-5 設楽博己さんのプロフィール：1956年生まれ、前高卒、静岡大卒、筑波大学大学院博士課程単位習得退学、東京大学大学院教授、放送大学客員教授、現在、群馬県文化財保護審議会委員など。
- 注34 会報25号P-28 表紙絵の画家、会報26号P-24 絵画教室（高崎）、会報27号P-18 県人会連合会副会長、(一社)日本美術院会長に就任。伊勢崎商高、中央大卒、毎年高崎シティギャラリーで、作品展と絵画教室の開催。2017年フランス芸術家協会（ル・サロン）の永久会員、2020年世界文化功労芸術大賞受賞、2022年衆議院議長賞受賞、1970年に二科展初入選 後、49回入選、第90回記念二科展で特選受賞等、他多数受賞。
- 注35 会報26号P-26 飯野文江さん：1944年生まれ、県立富岡東高卒、日本の景観コ

- ンテストで農林水産大臣賞等。
- 注36 会報27号P-5 富澤大輔さん：1974年前橋市に生まれ、東京医科歯科大学卒、2010年同大学院で博士、2021年に日本小児科学会学術研究賞、日本小児血液・癌学会学術賞、美国EXPERTSCAPE社より白血球分野でBEST DOCTORS IN JAPANに認定。
- 注37 会報27号P-7 一場麻美さん：渋谷高、洗足学園音楽大卒、TBSラジオキャスターサンフランシスコで活躍、テレビ朝日などでも活躍、放送作家。
- 注38 会報27号P-19 高橋里江さん：1937年渋谷市生まれ、渋谷高卒、多摩美術大中退し講師、国内外の展示会、毎年、東京芸術劇場で開催、児童が書道を通して創造性を育むことを目指す。最初は、都内の小・中学生からの作品から後に、全国から集まったが大学生や一般や企業・団体の役員の方々も応募された。
- 注39 会報24号P-21 小林元さん：1938年に前橋生まれ、慶応大卒、東レに入社、海外事業に従事。アルカンターラ社のトップマネジメントに14年、伊のナンバー1の中堅企業に、伊商工会議所副頭取、退職後明治大の招聘教授・文京学院大客員教授、参考文献『海外事業を成功に導く仕事術』ぎょうせい社、コメントドレ勲章の受賞等。
- 注40 会報25号P-13 地産マルシェ：経営理念「農業を支援し農家の所得向上に貢献」高崎市の農業資材の店から始まり、農産物直売所「食の駅」を展開。事業の特徴は、①生産者の顔が見える。②群馬と首都圏をつなげる販売ルートの設定。
会報27号P-16～17 岩井雅之さんのプロフィール：1954生まれ、富岡高、東海大学では、海洋資源学専攻、大手流通業で商売の基本を勉強。「農業を支援し農家の所得向上に貢献する」経営理念を総合的に目指す。ファームランド設立。参考文献：『「再エネ農業」で所得倍増』鶴蒔靖夫 IN 通信社（2019）。
- 注41 田中庸三さん：群馬宣伝特派員、元群馬観光特使、群馬県国際戦略推進有識者懇談会会員。
- 注42 サンヨー食品（株）代表取締役社長 井田純一郎さん：昭和55年前橋高卒、昭和60年立教大卒、平成10年社長に就任、藍綬褒章受章、在群馬モロッコ王国名誉領事、立教大客員教授、（社）サンヨー食品奨学財団代表理事、他に公職多数。
- 注43 NPO法人ソニリッサ代表理事 萩原涼平さんの経歴は以下の通り。1994年前橋に生まれ、前橋東高卒 東京スクール・オブ・ビジネス修了、2017年創業、同年10月、ビジネスデザイン全国コンテスト社会人部門で優勝、同年11月、フランス・パリで開かれたソーシャルビジネスの国際会議で表彰され、プレゼンを行う、群馬イノベーションアワードでは、「スタートアップ部門で入賞、2022年に山本一太知事の番組に出演、同年ぐんま地域づくり AWARD大賞受賞」。
- 注44 阿久澤克之さん：前橋高、東京学芸大卒、これまでに、NHKの「紅白歌合戦」や「クイズ面白ゼミナール」の構成や日本テレビの「24時間テレビ・愛は地球を救う」など手がけてきた。

参考文献

- [1] 清成忠男 (2020) 『地域創生への挑戦』、有斐閣、P-1, P-247, P-252。
- [2] 清成忠男 (2013) 『事業構想力』、宣伝会議、P-33～35。
- [3] 松田修一 (2005) 『ベンチャー企業』、日経文庫、P-15～16。
- [4] 柳 孝一 (2004) 『ベンチャー経営論』、日本経済新聞社、P-19。
- [5] 柳 孝一 (同上)、同上、P-22。
- [6] 太陽監査法人 (2006) 『プロフェッショナル・リスクマネジメント』、中央経済社、P-50。
- [7] 小淵昌夫 (2021) 『国際経営フォーラム』 No32 「ものづくり企業のレジリエントマネジメント」、P-73～79。
- [8] Jeremy Rifkin (2023) 『The Age of Resilience』、著 ジェレミー・リフキン 翻訳 柴田浩之、集英社『レジリエンスの時代』、P-424～425。
- [9] 編集長 織田達介 (2021) 『月刊事業構想』 「群馬から世界に発信するニューノーマル」、学校法人先端教育機構、P-99。
- [10] 東出浩教 (2018) 『ガゼル企業成長の法則』、中央経済社、P-1, P-24～42, P-208～220。

新聞掲載

- [あ] 小淵昌夫 (2009年7月15日) 日刊工業新聞・経営教室の頁、「中小企業の変革と危機管理」(上)、一予知・予防対応を徹底一。
- [い] 小淵昌夫 (2009年7月22日) 日刊工業新聞・経営教室の頁、「中小企業の変革と危機管理」(下)、一瞬時の判断と信用、不可欠一。
- [う] 小淵昌夫 (2011年6月21日) 神奈川新聞・SEARCHの頁、「中小・中堅企業の経営戦略と危機管理、環境変化への対応と持続的競争優位の確保」。

謝辞

神奈川大学経営学部教授田中則仁先生には、国際経営研究所の客員研究員へのご推挙を賜わり、様々なご指導を賜りました。この事例研究の執筆に際してもご助言とご指導を賜りましたことに感謝致します。

群馬県人会連合会副会長・事務局長・編集委員の古谷進さん、常任理事・編集委員の阿久澤克之さん、以下同じ、理事・編集委員の星野祐一さん、坂本道子さん、石崎直美さん、神成尚亮さんには、取材と編集に対するご支援とご協力を頂きましたことに感謝致します。